

# 直川史談会のあゆみ

## 序

直川村内あちこちから縄文、弥生式土器の発掘されたことにより、本村の歴史の古さが想像されるが、特に気候、風土に富み山や川魚、肥沃な土地の多いことにより古代人の住居したことがうなずける。又地名に浜ノ下や、向船場等の残る処より、交通の便も良かったものと思われる。特に本村の文化は、中世以降各所に優秀なる跡を残し、史跡、遺跡に関連する有形、無形、伝説、伝承による無形文化、生活風習により生み出された民具、また文化に身を挺した偉大な先覚者、これらの遺産は夥しいものがある。しかし世相の変化はこれを破壊し、営々として積み重ねた古里の歴史が、消滅しつつあることを憂い、又佐伯史談会にも刺激され、休石博美氏の提唱により、これらの文化財を調査して記録に残し、村民の文化財に対する関心と理解を深めると共に、末永く後世

## 直川村 小野農一

に伝えるため、昭和四十一年三月五日直川村史調査会を結成し活動を開始した。会長に長田良太郎、副会長に山下貞男、顧問に泥谷謹村長、戸高長生助役、柳井角治村議会議長、平井真寿美、志賀孝、会員に赤木より四名、仁田原六名、横川五名、上直見六名、下直見四名、計三十二名で発足した、事務局を村教育委員会内に置き大杉淳男がこれに当たった。

しかし村史調査会は、少人数のため活動も充分ではなかったため、会の活動を活発にしその成果を期するため会員の増強が急務であった。昭和四十六年村民に呼びかけた結果多数の賛同者を得て、三月二十三日会合を開き直川村史調査会を改め、直川史談会として発足し、直川史談会規約を制定した。会長に柳井雅雄氏を選任し、会の団結と活動の推進を誓った。毎年度初めに会員による定期総会を開催し、事業報告と共に事業計画を審議し、

活動の推進を図った。

昭和五十二年暮本会に多大の功績を残した、会長柳井雅雄氏は事情あって東京方面に転出した。柳井会長は、卒先して古塔の調査復元に取組むと共に、古文書、古書籍を繙き、『直川村郷土史』四冊の発行を完成させた功績は誠に大なるものがあり、衷心より感謝申上げると共に、惜別の情禁じ得ないものがある。『第七号直川史談』



直川村郷土史

の編集後記にこう書かれてある

「転出されても又直川のふるさとを訪ねてもらいたい」と話した処「もう生涯この直川に帰えることはないだろう」と静かに話された言葉は黄昏の中に淋しく聞えた。

これより前昭和五十一年二月三日柳井会長は老齡を理由に会長を辞され、後を受けて山下貞男会長が選任された。副会長小野農一、幹事休石博美、事務局大杉淳男（幹事）が決定した。

休石博美幹事は生業のかたわら、各地の古塔を個人的に調査した。その調査時間は生業の半分にも渡ったと言っても過言ではない。調査は村内は勿論、村外、県外にも及び、その調査資料の提供により多くの新事実を発見、古塔の保存管理に積極的な提言啓蒙を行なった。その功績は実に多大なるものがある。宮崎県北川町瀬口の御頭神社の復興にあたっては町民に対し惟治公の偉大さを訴えて、理解をうながし、遂に御社の完成を見るに至った。瀬口の人々は休石会員の功績を永く記念するために記念碑の撰文を休石会員に依頼した。

昭和五十五年三月現在、史談会員も四十三名となり、

五十二年には副会長に休石博美氏を選任し、幹事に小野農一氏を決定した。

村民の文化財に対する関心も高まり、古塔の環境も整備されるに至った。啓蒙については村報掲載を初め、機関紙『直川史談』の発行により村民の文化財に対する認識も深まり又青年団活動の中にも「文化財を見直そう」の気運を醸成し、後継者への引継ぎも出来つゝあるのではないかと、内心喜びに堪えない次第である。特に本村の場合小中学校の先生達による村内の文化財勉強会が毎年のように行なわれていることは、児童生徒の文化財に対する認識を深める上に、大いに貢献するものと、村教育振興協議会の活動に期待するものである。

### 直川史談会のあゆみ

#### 一、直川村史調査会のあゆみ

昭和41・3・5 直川村史調査会誕生

当時の役員 会長長田良太郎、副会長顧問山下貞男、顧問泥谷 謹（村長）、戸高長生（村助役）、柳井角治（村議会議長）、平井真寿美、志賀 孝  
会員 安藤庄作、広瀬康夫、柳井雅雄、安藤直木、戸高

竹男、桜井 幸、柳井久登、小原義弘、大杉淳男、足立幸一、秋元 潔、稲好 繁、小野賢木、日向瀬 定、村上 実、休石博美、巽 吾一、平 利剣、重田正一、柳井今朝義、泥谷喜久司、高瀬太一郎、曾宮衛吉、立野昇一、柳井周治

以上会員三十二名にて発足した。

昭和41・5・1 文化財の調査

会員十一名の参加により、村内神社では最も古い仁田原内水の熊野神社と杭ノ内得度山西光庵の古壺の調査を行った。熊野神社は御神符の柄に大同二年二月二十八日とある。社内には元禄三年作の三十六歌仙絵あり、又境内には周囲四米九十五センチの樺あり一〇〇〇年を経過したものと云われる、西光庵には宝篋印塔が昔のまま残っており銘記がある。

昭和41・11 直川村産業文化祭に参加

会員並村民多数に呼びかけ土器、石器、鉄器を初め仏像、古銭、書画、系図、古文書、武器、刀剣、古美術、農機具、写真その他文化財の出品ありて有意義であった。

昭和42・11・12 西南の役の陸地峠古戦場調査と慰霊祭を実施、直川史談会、佐伯史談会共催により直川村関係

十三名、佐伯史談会関係外十九名、計三十二名が参加した。長田良太郎会長の次の歌が残っている。

「汗ばみし からだつめたし晩秋の

風あらく吹く 陸地嶺の上」

尚当日の登山記録は、羽柴先生の執筆により「佐伯史談第三十四号」に掲載された。又会員による西南戦役の口伝談は、パンフレット等により紹介されているが後日冊誌として発行された。

## 二、直川史談会のあゆみ

昭和46・3・23 直川史談会発足

直川村史調査会を改め直川史談会が発足した。規約なども制定し初代会長に柳井雅雄氏が選任された。

昭和46・6 赤木栗林正明寺跡の層塔調査と現地拓本講習会を行なった。終了後神内福寿山永田寺跡の石幢を調査した結果それぞれ次のような銘記がある。

石幢銘文 謹奉造立六地藏一基

盛嶽左京助貞則

為右現世安穩後世善所也

其時天文十八年 己酉九月十二日

施主敬白



神内釈迦堂石幢  
(県指定文化財)

層塔の塔身銘文

密望即信願主各信力弥堅善根增長二世願望一切圓成

三界六凡全登竟岸皆應永十八年 辛卯三月十五日時結衆

ホ大工玄宗敬白

内容 西南の役郷土戦史、赤木吹原の古跡と伝説、歴史の古里赤木の庄。

昭和46・9・12 赤木中津留「海潮山観音庵」古塔の復

元、地元の協力を得て古塔十三基を復元した。この庵は仁田原宝林山正定禅寺の前身と云われるが現在正定禅寺の末庵で本尊は観音菩薩である。又当庵は佐伯四国八十

八ヶ所第五十四番札所で多く古塔がある。中でも宝篋印塔三基は、やゝ欠損するも昔の姿の儘である。大きな層塔もあるが笠部の紛失がある。宝篋印塔二基には次のような銘記があり今より四六八年前の墓石には珍らしく高貴な夫婦のものであろうか、特に「預修」の文字は村内では見当たらない貴重なもので、生前七七日の法要を済ませ後世の安穩を祈ったものであろう。大切に保存したいものである。

#### 墓石の銘文

向って右側 預修全得功德主 荅巖光薰居士

干時永正九年 壬申 如意珠日 敬主

向って左側 預修全得功德主 保宣明安信女

干時永正九年 壬申 八月彼岸日 敬主

昭和46・10 直川村郷土史第二集発行(十八頁)

内容 古代に於ける生活文化考察、小庄屋春山孫左エ門物語、田植唄、郵便業務の沿革、明治時代の小学校沿革史。

昭和46・10 資料室の設置

直川村公民館の一室を資料室として民俗資料の収集を計画、会員並に村民に資料の提供を依頼する。収集の結果

衣五、食六、住五〇、農二八、計八九点が保存され、他に遺墨写真が数十点ある。

昭和46・11・14 赤木吹原地蔵院の層塔復元

大正年間に吹原地蔵院より佐伯市山手区土屋六衛氏方庭園に移転していた層塔は、地元民の多年の要望で役場職員地元の方々の協力で本日無事現地に復元した。この地蔵院は神明山地蔵院と言い、仁田原の宝林山正定禅寺の末庵で本尊は地藏菩薩である。この層塔は古く鎌倉時代の作と云われている。横には寿永年代の銘記のある宝篋印塔があり何れも村指定文化財である。

昭和46・11・21 西南の役陸地峠古戦場の遺物発掘調査

この峠の「アサジリがたお」に埋めたと云われる西南の役の戦死者の遺品発掘と現地に於て供養法会を営んだ。

黒沢庵主後藤正観氏堂師浄光庵主酒井関道氏を初め十三名が参加した。標高五四一米の陸地峠には宮崎県北川町より林道が完成して居り、本村側よりの林道も五十五年度には完成するので、史跡指定と共に現状のままの公園化と西南戦役記念碑建立の計画を早急に計画したいものである。

昭和46・12・10 赤木堂師転輪山浄光庵古塔の復元、地

元の協力を得て庵主酒井閑道僧師の指導により百基余りの古塔の内三十二基を復元した。この中の宝塔（一、八二米）一基は村内でも最も大きく貴重なものである。復元された宝篋印塔二基には墨書がある。内一基には「応永二十八年二月彼岸中」とや々と読みとれる。即ち一四二一年室町前期の造立である。

昭和46・12・22 直川村合併二十周年記念行事に参加、



吹原地蔵院の発掘調査

会員の努力により復元された古塔十基の四ツ切写真に説明を添え、他の民俗資料と共に村の公民館に展示した。

昭和47・11・7 吹原地蔵院の発掘復元

この地蔵院は吹原地区の川向いにありて多数の古塔が埋没していると云う。近世に至りてこの地に移したと伝える。

昭和48・2 直川村郷土史第三集発行（二八頁）

内容 一揆の集結。

昭和48・9・23 佐伯史談会により用來城調査

佐伯史談会員小野英治氏のご尽力により仁田原用來城の測量が実施された。伝説によれば、この城は佐伯氏の柵牟礼の支城であったと伝える。豊筑乱記によれば、天正十四年十月島津家久は日向から梓山を越えて、豊後の国大野郡宇目郷にはいり、朝日獄城主であった野津院の柴田紹安の内通によって大野郡の諸城は相次いで陥落し、海部郡の佐伯氏の柵牟礼城を攻めたが、佐伯惟定は死守して退かず、後に豊臣秀吉を感動させ感状を受けたと云う。柵牟礼を攻める途中にある用來城は、この時島津の大軍によって陥落したものであろう。山上の城跡は七二二、五平方米で今でも堀切の跡が残っている。

昭和49・7 上直見竹ノ下供養塔調査

今より二七〇年前祖柱蔵司と云う人が両親の供養のため身を清め香をたきつゝ法華経を唱えながら一石一字の漸写をなし遂げたと云う供養塔である。銘文は願成寺小比丘仁叟宗恐に依頼して書いてもらったものである。拓本を取り大切に保存したいものである。

昭和49・2・11 上直見源六原の調査

この原は二町歩の広大な高台で古代人の住居跡ではないかと調査したが、矢じり等の出土で発掘は終わった。

昭和49・7 次の二件を総会に於て決定した。



佐藤大庄屋夫妻

①長さ二、一五米、二三センチ角の「従是東佐伯領」の

御影石造りの標柱が横川月形、武田 章氏方に保存されているので、この標柱を村指定文化財に指定して戴くよう又所有者に展示して戴くよう要請することゝした

②天保十年十月、明石秋室が郡代奉行として本村内を巡視の際、赤木村より柚ノ原村に越える堂師坂に於て次のような作詩をしているので、これが文学碑の建立を推進することを決定した

堂師坂 明石秋室

堂師坂望柚原村 林麓斜連夕照囀

長杉老松青無數 映出桜花一樹雲

尚巡視の時の絵図の写を保管する（長さ七米）

昭和49・9 上直見芸能保存会の結成

享保二年大坂本より伝授された杖踊りを後世に伝承するため、富尾神社、肘切神社の氏子一六〇戸が検討し、氏子会員四十人を以て保存会を結成した。初代会長に大畑一善氏、副会長に休石博美氏、会計山下貞男氏、昭和五十二年役員改選の結果会長に休石博美氏、副会長に小野常喜氏、会計山口政義氏が選任さる。杖踊りは両神社交互に毎年秋の祭典の際奉納されている。

（この続は78頁に続く）